

ウエーブ

時評



金子 熊夫

かねこ・くまお 外交評論家、エネルギー戦略研究会会長、EIEE会議代表。元外交官、初代外務省原子力課長、元東海大学教授。ハーバード法科大学院卒。82歳。近著は「小池・小泉「脱原発」のウソ」(飛鳥新社)。

原子力で緑の地球を！

「サー(占領軍最高司令官)宛てに建白書を送り、原子力研究の自由を認めるよう申し入れ、また、対日講和条約責任者のダレス(後にアイゼンハワー政権の国務長官)にも直談判したことなどはあまり知られていない。

突然ながら、今回が本欄への最後の寄稿となるので、何かそれにふさわしい遠大なテーマで思っただが、紙幅が足りないので、代わりに最近の身辺報告から。

11月半ばに久しぶりに台湾へ行ってきた。筆者主宰の研究会の有志会員諸氏と共に、台湾のエネルギー・原子力事情を視察するのが主目的であった。台湾では、ちょうど1年前の11月24日に、蔡英文政権の「2025年までに原発ゼロ」政策の是非を巡る国民投票が行われた結果、「原発ゼロ」反対派が勝った(本年5月8日付本欄の拙稿「原発と住民投票」参照)。

「以核養緑」のスローガンを掲げた市民グループで、その主要メンバーと一タじくり話し合った。印象的だったのはメンバーの大半が20〜40代の若者で、中には子供の母親も何人かいたが、彼らは一様に「台湾は日本以上に資源小国であり、将来の中国との関係を含め国家安全保障上も原子力は不可欠。子供たちのためにも頑張っ

て原発を維持せねば」と吐露していたことだ。日本では若い女性などは子供の安全のため原発は否定的という人が多いが、それとは正反対。視点が基本的に違うことに強い感銘を受けた。

ちなみに、彼らが敬愛する李登輝元総統も、「将来独立するためにも安全保障上原子力は不可欠」という立場だとか。つまり、現在の民進党の政策は矛盾しているわけで、蔡政権は認識が甘いと言っていた。

来年1月11日に行われる次期総統選挙では、今夏以来の香港デモ騒動の影響で対中警戒心が高まっているので独立志向の民進党有利の予測が多いが、右の点について台湾人がどういう判断を下すか、大いに注目される。

それに付けても、彼らが掲げる「以核養緑」(英語では「Go Green with Nuclear」)は実に明快でパンチが利いている。日本語にす

ればさしずめ「原子力で緑の地球を！」と言ったところだが、これを日本でも広めたいと思うので読者諸賢にも是非ご協力を。

さて、日本では、11月末に中曽根康弘元首相が101歳で大往生され、様々な追悼記事がメディアを飾った。その中で、元首相が戦後間もない時期に、原子力導入に指導的役割を果たしたことが紹介され、あらためてその先見性に感心したという人が多いが、実は故人は、仁科芳雄研究室(戦時中に

理研で原爆製造計画を担当)のサイクロトロンが占領軍によって東京湾に沈められたことに抗議し、当時泣く子も黙ると言われたマッカー

実は筆者は、17年前に自ら企画した緊急国際会議(2002年7月8日経団連会館で開催)に故人を特別に招き、その辺の歴史的背景を詳しく語っていただいた。その全文が次のURLに記録されているので、この機会に是非ご覧いただきたい。

<http://www.eecom.org/old/020708report.htm>

冒頭で触れたように今回で「ウエーブ」とはお別れ。マッカーサーの名言を中曽根流にもじって言えば「老兵は死なず、消えもせず、今しばらく頑張るのみ」。長年のご愛読深く感謝。今後は電子メールで。kaneko@eecom.org